

リヴィングストンの見る東アフリカのアラブ商人

藤 田 緑

1. はじめに

デイビッド・リヴィングストン (David Livingstone, 1813-73) が、中央アフリカでナイル川の源流を探索中に消息不明となり、その生死が世間の耳目をあつめたのは1860年代後半、ちょうど日本が近代国家としての産声をあげたばかりのことだった。

『ニューヨーク・ヘラルド』紙のスペイン特派員だったヘンリー・モートン・スタンリー (Henry Morton Stanley, 1841-1904) は、1869年10月急遽パリに呼び戻され、若き社主ジェームズ・ゴードン・ベネット・ジュニアからリヴィングストンの生死を確かめるよう特命を受ける。救出ではなく、あくまで生死の確認が目的であったからであろうか、ベネットはスタンリーをアフリカには直行させず、まず北アフリカ、パレスチナ、トルコ、ロシアでの報道に従事させ、それからインドに向かわせる。スタンリーはインドに着いて、はじめてリヴィングストン探索の本格的な準備に取りかかった。⁽¹⁾ モーリシャス経由でザンジバル島 (Zanzibar) にスタンリーが到着したのは、ベネットの命を受けてから1年3ヶ月が経過した、1871年1月のことだった。もちろん、依然としてリヴィングストンの消息は不明のままだった。

意外に知られていないことだが、当時、ザンジバル島はヨーロッパ人による「アフリカ探検」の重要な基地の役割を果たしていた。探検を目指す者は、個人であろうと、集団であろうと、ザンジバル島で探検に必要な情報を入手し、人夫や物資を調達したからである。それはリヴィングストンもスタンリーも同じだった。ヨーロッパで「アフリカ探検」が一つのブームとなっていた頃のザンジバルは、東アフリカ一円で商業活動の中核をなし、島は活況を呈していた。産業は発達し、人も物も溢れていた。

1871年11月、スタンリーはリヴィングストンと、現在の国名で言えばタンザニアにあるタンガニカ湖畔の南東の町ウジジ (Ujiji) で、ザンジバル島の対岸の町、バガモヨ (Bagamoyo) を発つてから約240日後に、劇的な邂逅を果たす。あまりに有名なあの挨拶、“Dr. Livingstone, I presume.” (リヴィングストン博士と拝察いたしますが)、“Yes.” (左様)、の言葉を二人が交わした時、彼らを黒人だけではなく、大勢のアラブ人も取り囲んでいた。彼らはザンジバルから進出してきた、象牙と奴隷の収奪のために隊商ルートを開拓した、アラブ商人たちである。リヴィングストンをスタンリーが「発見」したウジジの町も、アラブ商人のコンゴに至る通商ルートの重要な拠点であった。

奴隷となる黒人はコンゴ地方（現ザイール）で集中的に捕獲されていたからである。

本稿の目的は、これまであまり注目されることがなかった、1860、70年代の東アフリカ海岸部からアフリカ中央部に至る地域社会と人々の移動の様態を、スタンリーやリヴィングストンの記録を中心に明らかにすることにある。また、それら広範囲にわたる地域の象牙と奴隷の取引を支配することで巨万の富を築きながらも、リヴィングストン、スタンリーをはじめとするヨーロッパ人探検家と積極的にかかわりを持った一人のアラブ商人にも注目する。今回は紙幅の関係で簡単な紹介にとどめ、ヨーロッパ人探検家の「発見」の再評価を含めたアラブ商人の探検に果たした役割に関する論考は、別の機会に譲ることとする。

2. ザンジバル島

アフリカ東海岸沖インド洋に浮かぶ小島のザンジバルは、古代よりアラブ文化の影響を受けてきた⁽²⁾が、ザンジバルが交易の上で重要性を帯びるにつれて、アラブ人だけではなく、ポルトガル人やインド人をもひきつけてきた。ザンジバルを巡るこれら三勢力の入り組んだ歴史をここで紐解く余裕はない⁽³⁾が、ポルトガルの東アフリカ進出は15世紀以降に始まり⁽⁴⁾、1505年には早くもキルワ（Kilwa）とモンバサ（Mombasa）を襲撃し、1507年にはモザンビーク島に要塞を建設、1509年にはマフィア（Mafia Islands）、ペンバ（Pemba）、ザンジバルがポルトガルの支配下に置かれた⁽⁵⁾。17世紀中葉になるとオマーンとの勢力争いを繰り返し、ポルトガルの支配力が東アフリカで後退し始めるのは、17世紀の終わりになってからとなる。

1820年代になると、オマーンの領主セイド＝サイド（Seyyid Said, Said b. Sultan Al Busaidi, -1856）が、アフリカ東海岸に積極的に攻勢をかけ、勢力を拡大、1840年には活動拠点をマスカットからザンジバル島に移し、現在のソマリア南部からケニア、タンザニアにかけての沿岸部を手中に収めた。奴隷と象牙⁽⁶⁾と丁子が交易の中心を占めた。現在でも主要特産品の一つである丁子は、1812年頃、現在のレユニオン島からザンジバルにもたらされたものである⁽⁷⁾。1822年に2箇所のプランテーションで栽培されるようになってから急速に発達し、丁子は奴隷、象牙に次ぐ重要な輸出品となった。

リヴィングストン搜索のため、1871年にはじめてザンジバルを訪れたスタンリーだったが、風光明媚なこの島は彼をすっかり魅了した。1月6日付の日記で彼は、ザンジバルが「自然が創り給うた最も美しい一個の宝石」であると最大限の賛辞を贈っている。そしてさらに、こう続けた。「これまでたくさん島は見てきたが、人の心を癒すのに、これ以上完璧な場所を、私は知らない」⁽⁸⁾。

一方、それより5年前に同じ島を訪れたリヴィングストンは、実に対照的な記録を残している。彼は景色の美しさには一言も触れず、当時世界第一の奴隷市場でありながら排泄処理施設が一切なく、排泄物を海岸にただ放置するのみであったことから、市が開かれた後に充満するこの上ない悪臭に辟易し、ここはざんじバル（Zanzibar）ではなく、くさいバル（Stinkibar）と呼ぶに相応し

いと切り捨てた⁽⁹⁾。

リヴィングストンが晩年に訪れた当時のザンジバル島は、約4千人のアラブ人が約20万のアフリカ人の島民を支配しており、そのアフリカ人の大半が奴隷だった。その他には、数千人のスワヒリ人 (Swahili) の仲買人と、約70人の白人、それに、バニアン (Banian) と呼ばれるヒンドゥー系インド商人がいた⁽¹⁰⁾。彼らバニアンのなかには裕福な者が多く、彼らが資金と多額の商品をアラブ人隊商に供給することで、後述する内陸部との大規模な商取引、アフリカ大陸からの奴隷と象牙の売買が可能となった。ザンジバル島の白人の一部も奴隷貿易にかかわっていた。その一人、H. A. フレーザー (H.A.Fraser) は、奴隷の労働力を使って大規模な砂糖のプランテーションを運営していた⁽¹¹⁾。リヴィングストンが最後に心を痛めたのが、このフレーザーの存在だったといわれている。

ザンジバルのアラブ人たちは、スワヒリ人と武装した奴隷からなる大規模なキャラバン、隊商を組織して、定期的に内陸部へと向かった。目標の地域を定め、彼らは数ヶ月間にわたって襲撃し、その地域の村落が保有している象牙と住民を奴隷として確保するという方法をとった。そして、彼らは成人の奴隷には象牙を運ばせながら海岸まで行進させた。かなりの数のアフリカ人たちが海岸に到達するまでに命を落とした。リヴィングストンも、内陸部から海岸まで移動する奴隷の死亡率の異常な高さを記している。捕らえられたアフリカ人の5人のうち、海岸まで生きてたどり着くのは一人といわれたほどだった⁽¹²⁾。19世紀中葉のアフリカ大陸は奴隷狩りによって人口が激減した地域が多く、大陸は文字通り瀕死の状態にあった。アフリカ人の惨状が、死の直前までリヴィングストンを悩ませたことは言うまでもない。

ザンジバルまで生きて辿り着いた奴隷たちは、次には奴隷市のために太らされた。男性は、ザンジバルではもっぱら丁子や砂糖を栽培するプランテーションの労働力として注ぎ込まれた。一般的にザンジバルでの奴隷の扱いは、他の場所に比べて寛大であるとよくいわれる。しかし、売買された大多数の奴隷はダウ船に詰められるだけ詰め込まれ、当時、英国や米国海軍が行っていた奴隷貿易取締りを避けるため、必要以上に迂回しながら長い航路を、中東、インド、遠くは東アジアまで運ばれが多かった。ザンジバルで奴隷市を訪れたリヴィングストンは、その時の様子を次のように記している。

奴隷市場を訪れると、約300人の奴隷が売買にかけられていた。その大多数はニャサ湖やシレ川から連れてこられた人々だった。なかには私が顔や刺青や瘢痕から会ったことがあると認識できた者たちもあり、彼らもまた私を覚えているのではないかと思ったりした。実際、一人の女がニャサ湖をわれわれがボートで渡ろうわさを聞いたことがあると私に話した。けれども、彼女は実際には私とは会わなかったという。他の奴隷は湖の南西部にあるチベタの出身だった。大人は捕獲されて売られることに全員が屈辱を感じていたようだった。奴隷はまず歯がチェックされ、足を見るために衣服がまくられ、棒でつつ

いてきちんと歩けるかが調べられた。なかには手をつかまれて前に引きずり出され、大声で売値が連呼される奴隷もいた。買い手の大半は、北アラブ人とペルシャ人だった。⁽¹³⁾

ザンジバルまでの奴隷の輸送、すなわちキルワやその他の海浜都市からザンジバル島に奴隷の積荷を運ぶことは、1866年当時はまだ合法的な行為⁽¹⁴⁾だった。だが、それらの積荷をザンジバルからラム (Lamu) より北部に運ぶことに関しては、1845年に英国とセイド・サイドとの間で締結された、奴隷貿易をサイドの勢力範囲内にとどめる、すなわち、奴隷船の運搬をソマリアにある海浜都市ブラバ (Brava) とモザンビークとの国境にあるデルガド岬内に限定するというハマートン条約⁽¹⁵⁾に抵触し、また、情勢に鑑み、ザンジバルからの奴隷搬出の規制を求めたていた、サイドの後継者となった領主マジッド (Majid b. Said Al Busaidi) の意向にも反した。しかしながら、領主の規制も実際には効力を発揮せず、ザンジバル島とコモロ島 (Comoro Islands) に常駐していた英国海軍の取締巡洋艦も、ダウ船の一部を取締ったに過ぎなかった。したがって、ダウ船によっては夜陰に乗じてザンジバルを出帆する船もあり、また、取締り船が視界になければ、紅海、マスカット、ペルシャ湾へと猛スピードで奴隷船は立ち去っていった⁽¹⁶⁾。

3. リヴィングストンの見た奴隷貿易の実態

『闇の奥』の主人公マーロウの、子供の頃は「まだこの地球上に、空白がいくらでもあった」⁽¹⁷⁾という独白を待つまでもなく、19世紀半ば近くまで、ヨーロッパ人のアフリカの地理に関する知識は、沿岸部と一部地域を除けばゼロに等しかった。地図には余白を埋めるため、地名の代わりに象や犀やエキゾチックな黒人王の絵が描かれた。当のアフリカはと言えば、東海岸ではザンジバルのアラブ商人たちが、大陸の内陸部に進出し、「商品」を求めて隊商路、隊商網を発達させ、要所要所にアラブ人町を築いていった。

19世紀中葉に、アフリカ内陸部に足を踏み入れたヨーロッパ人は、ほとんどいなかった⁽¹⁸⁾。もちろん、時として、冒険家、探検家と称する白人が、単発的にある一定地域を通過したことはあったが、いわゆる文字通り内陸部に入り込み、アフリカ中央部を踏破したのは、リヴィングストンとスタンリー以外では、リチャード・バートン (Richard Francis Burton, 1821-90)、ジョン・ハニング・スピーク (John Hanning Speke, 1827-64)、ジェームズ・グラント (James Augustus Grant, 1827-92)、サミュエル・ベーカー (Samuel White Baker, 1821-93) の4人であった。とはいっても、彼らもほとんどがアラブ商人の切り拓いた隊商ルートを利用した上での探検だった。したがって、正確には、彼ら4人は、19世紀中葉にアラブ商人の隊商路をたどった、数少ないヨーロッパ人ということになる。リヴィングストンが別格であるのは、彼は約30年間で、距離にして通算約30万5千キロ、面積にして約250万平方キロメートルにおよぶアフリカ地域の踏破記録⁽¹⁹⁾を、やむを得ない場合に限りアラブ人の隊商ルートを利用したものの、それ以外は独力で打ち立てたところにある。

デイビッド・リヴィングストンは、1813年3月スコットランド、ブランタイアの貧しい家庭に生まれた。10歳で紡績工場で働き、苦学してグラスゴー大学で医学と宗教を修め、はやくから海外派遣の伝道医師を志した。もともと中国での伝道を希望していたが、アヘン戦争の勃発によりそれが叶わず、南アフリカへと向かったのが、1841年、以来30余年、1872年に現在のザンビアのチタンボで、志し半ばで落命するまで、アフリカでの伝道と探検に心血を注いだ。

リヴィングストンは、はじめから探検家を目指したわけではなかったが、伝道所の建設、開設のために南部アフリカの内陸部へと移動を続け、1849年までに大カラハリ砂漠を横断してヌガミ湖を「発見」、さらに北進して1855年にはビクトリア瀑布を「発見」するに及んだ。その間アンゴラの、かつて奴隷貿易で栄えたロアンダ港に内陸から到達し、そこからヨーロッパ人として初めて大陸を横断した。1856年、16年ぶりに英国に戻った彼は、その地理学上の貢献から王立地理学会より金賞牌を贈られ、宣教師、探検家としてばかりでなく、地理学者、動植物学者、天文学者としての名声も博した。

ヨーロッパ人として、とわざわざ断りを入れるには理由がある。実は、リヴィングストンに先立つこと数十年前、1802年から1811年にかけてP. バプテスタとA. ジョゼという二人の混血児のポルトガル商人が、アフリカ大陸横断に成功していた。彼らはアンゴラからザンベジ川に到達したのだった。もう一人、ベン・ハビブ (Ben Habib) という名のアラブ人も大陸を横断していた⁽²⁰⁾。リヴィングストン自身も探検の最中、この二人のことを知り、大層衝撃を受ける。しかし、その二人が「黒人」であったことが判明し、初の大陸横断の栄誉が、依然として自分のものであることに、リヴィングストンは胸をなでおろす⁽²¹⁾。当時の了解事項として「白人」であることが前提であったからである。

リヴィングストンの「探検」に対する再評価をここで試みるつもりはない。だが、リヴィングストンの内陸探索と、その都度発表された探検記録により、アフリカ大陸内陸部で行われていた残虐きわまりない「奴隷狩り」の実態が、欧州諸国に伝えられたことの意義は大きい。1858年に出版された第一回探検記録である『宣教師の南アフリカ調査旅行記』(*Missionary Travels and Researches in South Africa*)により、英国ではそれまでであった奴隷制・奴隷貿易反対運動がさらに強化され、政府も根絶のための資金を即座に拠出するなどして対応した。東アフリカでの奴隷貿易によって引き起こされる大虐殺は、リヴィングストンの第二回探検記、『ザンベジ川とその支流』(*Narrative of an Expedition to the Zambesi and Its Tributaries*)で明らかにされた。特に、挿入された首枷をつけられて海岸まで行進する奴隷の集団のリトグラフは、視覚に訴え、読者に強烈なインパクトを与えた⁽²²⁾。同様のイラストは1875年に刊行された最後の探検録、『リヴィングストンの最後の日誌』(*The Last Journals of David Livingstone*)にもあり⁽²³⁾、それらがヨーロッパでの反奴隷貿易の気運を決定的なものにしたといわれている。

1866年4月6日、リヴィングストンは最後のアフリカでの探検調査を始める。彼はあちこちでザ

ンジバル、バガモヨから来たアラブ人奴隷商人たちと出会い、また、彼らによって徹底的に荒らされた村を目にする⁽²⁴⁾。リヴィングストンは特にこの3回目の探検で食糧不足に悩まされるが、これはアラブ人の奴隷捕獲活動と無関係ではない。彼らは、食糧までも根こそぎ持ち去り、その後には火を放つからである。アラブ人の率いる隊商が通過したあとには、木に括り付けられた死体や、締め金で締めつけられたまま放置された住民の姿を見ることは、珍しくはなかったという。

私たちは奴隷の女性が銃で撃たれたのか、体を刺されたかして道端に倒れているそばを通り過ぎた。その朝早くここを通ったアラブ人が、彼女がもう歩けなくなり、彼女に支払った代金が無駄になるのを怒って、そうしたのだということだった…

今日私たちは餓死した人に出会った。彼は非常にやせ細っていた。私たちの仲間の一人が道に迷った時、柵に繋がれた多くの奴隷が食料不足から主人に見捨てられているのを発見した。彼らは何処から来たのか話すことも出来ないほど衰弱しきっていた。ある者はとても若かった⁽²⁵⁾。

当時の探検家や宣教師の記述には、事実を誇張したものが多い。ことさら、彼らの訪れた場所を「野蛮」で「困難」に描けば描くほど、探検にしる伝道にしる、彼らの行為がそれだけ「偉業」としての輝きを増すからである。と同時に、読者の側も怖いもの見たさの、いわゆる「暗黒のイメージ」を期待し、求めていた。つまり、事実の歪曲や誇張に関する限り、両者のニーズがぴったり符合するという側面がある。大衆を対象とした出版物になればなるほど、その傾向が顕著となることは言うまでもないだろう。

リヴィングストンの博物学者、地理学者、あるいは自然観察者としての観察と報告の精確さは、今もって色褪せてはいない。また、彼の著作が今日もなお読者を惹きつけるのは、その強靱な精神力と行動力、信仰心と客観的なものの見方による。リヴィングストンは、彼の著作の影響力の大きさとこのものを、十分意識していたと思われる。それでも彼は当時の奴隷売買についてこう記録した。

東アフリカにおける奴隷売買について何かを述べようとするなら、誇張していると思われぬために、真実を控え目に語る必要がある。しかし、実のところ正直に言って、これは誇張など許されない問題である。その邪悪さはいくら語っても誇張し過ぎることはない。私が見た光景は、奴隷売買としてはありふれたものだったが、あまりにも凄惨を極め、私は常に記憶から消そうと努力している。私がどうしても同意することが出来ないようなことに対する思い出は、時がたつにつれて忘れるにまかせている。けれども、奴隷とされた人々の光景はひとりでの思い出され、夜中にそのことで目を覚まし、あまりにもはっきりとしているので恐ろしくなるほどである。⁽²⁶⁾

4. 内陸部におけるアフリカ人社会とアラブ人社会

ザンジバルに着いたスタンリーは、そこでリヴィングストンから届いた最後の手紙がウジジから発信されたことを知り、ウジジを目指して探検隊⁽²⁷⁾を出発させた。ザンジバルから対岸のバガモヨまで船で渡り、バガモヨからアラブ人通商ルートをたどってタボラ (Tabora) に向かった。タボラは東アフリカ海岸から512マイル、東部、中央アフリカ地域最大のアラブ人町であり、ウジジにいたる経路で最初の交易拠点であった。

スタンリーがタボラに到着した1871年6月23日、隣国ウニヤムウェジ (Unyamwezi) 地方⁽²⁸⁾の首長ミランボ (Mirambo, -1884) の攻勢に悩まされていたアラブ人たちは、どう攻略すべきか頭を悩ませていた。ミランボは徐々に勢力を伸ばし、周辺諸地域の一大脅威になっていた。ミランボ一派がタボラとウジジ間に跳梁し、隊商の通行がままならなかったのである。スタンリーは是が非でもウジジまで通商ルートを利用する必要があった。彼はミランボとの一戦を決めたアラブ人らに協力を申し出る。しかし、最終的にはこのアフリカ人とアラブ人の戦いは、「黒いナポレオン」という異名をとったミランボの勝利に終わり、タボラのアラブ人町は焼き払われ、スタンリーらはミランボとの対決を避けて別のルートをとらざるをえなくなる⁽²⁹⁾。

ミランボとの戦いに負けたスタンリーは、運搬人らが恐怖から隊商路以外のルートでウジジへ向かうことを拒否したため、運搬人を補充する必要にせまられた。3ヶ月かけてなんとか集めたものの、いざ出発すると逃亡や反乱にあい、その人数は半数以下に減った。さらに、猛獣や熱病などにも襲われ、前進は困難を極めた。しかも、極端な食糧と水不足にも直面した。スタンリーはほとんど餓死状態に陥り⁽³⁰⁾、生死をさまよっていたその時に、彼ら一行はウジジからやって来た黒人のキャラバンに出会い、その黒人たちからウジジに白人がいることを聞き及んだのである。

リヴィングストンがこのタボラの町を訪れるのは、彼がスタンリーに「発見」され、しばし行動をともにしたのち、スタンリーと別れてナイルの水源地を求める探検を再開して2ヶ月経った1872年5月のこととなる。すなわち、スタンリーのちょうど1年後に彼地に立ち寄ったわけである。リヴィングストンは、タボラでも、町の様子とそこに暮らすアラブ人について比較的詳しく書き残している。その一部をみてみることにしよう。

ウニヤンベ [タボラのある地域] のアラブ人人口は、男性が80人で、ほとんどが現地 [ザンジバル] で生まれた。彼らはマスカット出身のアラブ人に比べて髯が少なく、鼻梁がないのが特徴である。マスカットのアラブ人は現地生まれの彼らより高潔で勇敢、みなハンサムですべての面で優れている。80人の男性がそれぞれ約20人の扶養家族を持っているとすれば、総人口は1,500人から1,600人ということになる。ここは象牙基地と呼ばれている。象の牙が取引の主要商品であるからだ。だが、象牙が市に出ることはほとんどない。アラブ人はそれぞれ隊を組んで方々へと取引に出かけていくからだ。土地は無料で、トウモロコシ、デュラ、米、豆類が栽培されている。1, 2シーズン後に手に入れた象牙とともに

アラブ人たちは帰ってくる⁽³¹⁾。

さらに、タボラの地形とタボラを治めているアラブ人について、こう描写している。

[タボラは] 樹木に覆われた低い丘から、ゆるやかな斜面がひろがる平原で、灰色の花崗岩の塊がちらほら剥き出しになっているところもあるが、ほとんどは木がおい繁っていて、地肌はみえない。タボラはクウィハラと同じ丘の斜面にある。裾野のふもとは湿地帯で、雨季には洪水となって、西に向かって川のように流れる。サルタン・ビン・アリは非常に友好的である。彼はベドウィンのアラブ人で、長いアラブ銃と火縄銃を持っている。射撃の名人で、よく野ウサギを殺すのだが、かならず頭に弾丸を命中させる。年齢は60歳ぐらい、黒い目をして、背丈は6フィート、がっしりした体格で、彼の長いあご髯はほとんど真っ白である。⁽³²⁾

話は前後するが、ミランボとの戦いに敗れ、アラブ人の隊商ルートが通行不能となったため、スタンリー一行はウジジへはミランボの領地を迂回する形で南下を余儀なくされた。南下をはじめて1ヶ月以上経ったある日、一行はウジジから来たという黒人のキャラバンと行き交い、彼らから最近ウジジに「白人」が来たという前述の情報を手に入れる。その白人が以前にもウジジに来たことがあると聞いて、間違いなくその白人こそリヴィングストンであるという確証を得たスタンリーは、黒人を使ってスタンリーという名の「白人」がリヴィングストンに会いに行くことをその白人に伝えるよう命じた。だからこそ、リヴィングストンは黒人とアラブ人を従え、正装をして、スタンリーの到着を待ち受けたのである⁽³³⁾。互いに名前を聞き及んでいたにもかかわらず、また、彼ら二人をおいて他に白人はいなかったにもかかわらず、スタンリーは「リヴィングストン博士と拝察いたしますが」という第一声を発したのだった。

さて、この世紀の邂逅によって、世界中にその名が知れ渡ったウジジとは一体どのような場所だったのだろうか。再び、我々はリヴィングストンに頼ることにしよう。

ウジジはその地方の唯一の商業の中心地で、毎日市がたち、そこでは油、穀物、やぎ、塩、魚、牛肉、野菜などが売られている。時には象牙が持ちこまれることもあるが、象牙市と呼ぶには程遠いものである。この市のシステムは、アフリカ人が作りだし、彼らによって営まれている。毎日300人ほどの人出がある。最近は全くデュラをウジジでみかけない⁽³⁴⁾。

ところで、ウジジへは、リチャード・バートン⁽³⁵⁾とジョン・ハニング・スピーク⁽³⁶⁾が1858年にすでに到達し、二人は東アフリカの精密な地図を作製している。英国王立地理学会にはスピークが描いたウジジ周辺の地図(1858年)もある。彼らがタンガニーカ湖へ辿りついた最初のヨーロッパ

人ということになる。ウジジという地名がヨーロッパ側の記録に初めて登場するのは1840年代前半だが、バートンは1850年代後半になるまで、タンガニーカ湖畔には集落は形成されていおらず、気候の良い時期に時折タボラから隊商が訪れたにすぎないと述べている⁽³⁷⁾。けれども、スタンリーがリヴィングストンを「発見」した1871年には、スワヒリ様式の長方形型住居と黒人の円筒型の住居が相当数建ち並んだスケッチが描かれたことから、わずかな期間に町として、交易の基地として発達したことが窺える。

ウジジが、アラブ商人にとって、最も重要な都市であることはこれまでみてきたが、共存する形でアフリカ人もまた、ウジジで独自の幅広い流通ネットワークを組織し、運営していたことが分かる。アラブ人の町で生活の基盤ともいえる日常物資の流通は、黒人主導によって行なわれていたのである。

5. アラブ商人ティプー・ティップ

ザンジバルには、細々とながらも何世紀にもわたってアラビア半島南部、ペルシャ湾岸、インドに、奴隷を供給してきたという歴史がある。その規模が拡大されたのは18世紀後半になってからのこととなる。それは、フランスがレユニオン島、モーリシャスで奴隷を使って砂糖のプランテーション栽培をはじめ、ブラジルでも労働力を全面的に奴隷に依拠するプランテーションが始まったことによった。19世紀になると奴隷に対する需要は一段と増し、さらにオマーンの東アフリカ沿岸支配が、ペルシャ湾岸、インド向け奴隷貿易に拍車をかけた。これに伴い、東アフリカ内陸で新たな奴隷供給制度が出来あがっていったことは、すでに述べてきたとおりである。

奴隷と象牙の売買に従事し、富を築いたアラブ商人は数知れないが、そのなかでも巨万の富を手にし、中央アフリカに君臨した人物がいる。彼はヨーロッパ人のアフリカでの探検に積極的に関与したことで知られていた。通称ティプー・ティップ⁽³⁸⁾ ことモハメッド・ビン・ハメッド (Hamed bin Muhammad el Murjebi) である。

ティプー・ティップ (Tippu Tip) は、1840年ごろザンジバルの裕福なアラブ人の家庭に生まれた。家系に黒人の血が入っており、彼は黒人的な容貌を受け継いでいた。彼の父親も奴隷と象牙の商人で、ティプー・ティップも18歳ですでにその道に入った。場所はウニャニエンベ (Unyanyembe)。彼の父とも、父方の祖父ともいわれているが、ウニャニエンベ地方の有力者の娘との結婚によって、早くから地域との強いつながりを一族は持つことになった。彼は生来の強固な意志と大胆不敵な性格からすぐに商人としての頭角をあらわし、残酷無比な方法を用いて象牙と奴隷を手に入れ、富を蓄積していった。1867年に彼はアラブ人として初めてタンガニーカ湖より西部内陸に広がる森林地帯に踏み入り、ウテテラ (Utetera) を象牙と奴隷の取引の拠点とし、住民との戦闘を繰り返しながら、1875年には地域一帯を制定し、自らの「帝国」を築くに至った。1877年にはザンジバルで奴隷貿易が禁止となり、多くのアラブ人、スーダン人、スワヒリ人が内陸部に売買

の拠点を移して貿易を続けていくことになる⁽³⁹⁾。

実際、ティプー・ティップが巨利を博したのは「帝国」建設以降で、1890年には奴隷売買から手を引き引退してザンジバルに戻るものの、ザンジバルでは1895年に丁子のプランテーションを7つ、そこで働く奴隷10,000人を所有していたと言われている。⁽⁴⁰⁾

リヴィングストンはティプー・ティップと1867年8月30日、東方内陸部にあるムウエル湖付近で出会っている。これがティプー・ティップのヨーロッパ人探検家との最初の邂逅となった。リヴィングストンの日記には愛称と本名、ティプー・ティップから贈られた食料品と住民との物々交換に必要な物資、そして彼がその時に負傷をしていたことが記されているに過ぎない⁽⁴¹⁾。ちょうどその頃のティプー・ティップは、アラブ人にとって未踏の地に進出してきたばかりで、ンサマ(Usama)族との戦闘を終えたばかりだった。彼の傷はンサマ族が放った矢によるものだった。

これに対して、スタンリーのティプー・ティップに関する記述は詳しい。彼らの最初の出会いは1876年10月、アラブ商人はすでに中部アフリカの広大な地域の支配者となっていた。彼の第一印象をスタンリーは次のように記した。

彼は背の高い、黒いあご髭を生やした、黒人の容貌をもった、人生の働き盛りともいうべき年格好の男で、行動力があり、エネルギッシュで力の権化とも形容すべき人物だった。知的で立派な顔をしており、神経質に始終瞬く眼と、完璧な歯並びの、輝くばかりに真っ白い歯をもっていた…彼はいかにも育ちが良く、まるで廷臣のような雰囲気、私を迎え入れた。⁽⁴²⁾

ティプー・ティップはうやうやしくスタンリーを歓迎しただけではなく、スタンリー探検隊の先導と護衛の役を、武器、食糧、人足の提供を含め1,000ポンドの契約⁽⁴³⁾で引き受けた。

6. 結びにかえて

リヴィングストンやスタンリーばかりでなく、ナイル川の源流を突き止めたジョン・ハニング・スピークや、王立地理学会からリヴィングストン捜査のためアフリカに派遣された英海軍大尉のヴァーニー・ロヴェット・カメロン(Verney Lovett Cameron, 1844-94)もティプー・ティップの援助を受けている。ある意味で、内陸部の地理を熟知し戦略家でもあった彼の存在なしには、スタンリーを含む彼ら英国人たちの探検の成就是不なかったろうし、アラブ商人の通商ルートがなければ、探検そのものの性質も、違ったものになっていただろう。彼らアラブ人の存在がなくとも、いずれはヴィクトリア瀑布にもニアサ湖にもヴィクトリア湖にもヨーロッパ人が到達し、またナイル川の源流も明かされ、空白の地図は埋め尽くされていったらう。ただ、そのためには19世紀後半、あるいは20世紀初頭まで待たなければならなかったに違いない。

皮肉なことに、リヴィングストンにマイナス評価が加わったのは、リヴィングストンが当初奴隷

貿易をあれほど非難しながらも、その一方で、アラブ奴隷商人の支援を求めるという矛盾した行為をとったことを、英国人が知ったことによった。彼は最後の探検を開始するにあたって、ザンジバルでサルタンを表敬訪問し、サルタンはアフリカ本土でのアラブ人の協力を彼に約束したのだった。

1860年、70年代の東アフリカを語るのに、アラブの影響を無視することは出来ない。それは、ザンジバル島と東アフリカ海岸沿いに限られていたスワヒリ語が、現在の国名でいえば、ソマリア、ケニア、タンザニア、ウガンダからルワンダ、ブルンディ、ザイール、ザンビア、マラウイ、モザンビークまで広汎に浸透していったことから明白である。英国が本格的に植民地経営に乗り出す直前の、ちょうど狭間におかれた、系統だった情報も少ない時代に焦点を当て、断片的な記録を寄せ集め積み重ねることによって、アラブ人のアフリカ内陸部への進出と、進出に伴い地域社会に与えた影響の新たな側面が見出されるというものであろう。

本稿では、アラブ人町の様子や、通商基地での具体的な交易品の流れ、交易品以外の物資で市をひらき、基地を中心に独自の生活、流通ネットワークを確立していたアフリカ人社会の一端が明らかになった。今後はさらに、今ではほとんど顧みられなくなった、前世紀のヨーロッパの探検家たちが残した記録を丹念に読み込む作業を続け、それからザンジバル、アラブ側の史料を辿ることで、より客観的でより系統だった、19世紀中葉の東部から中央にいたるアフリカの諸地域における民族の移動と社会変容をめぐる研究へと発展させる予定である。

【註】

- (1) スタンリーがリヴィングストン搜索に着手するまでの行動は、まず、エジプトでスエズ運河の開通式に出席した後、ナイル川を遡行し、下エジプト旅行案内記を執筆、それからエルサレム、コンスタンチノーブルに向かい、クリミア半島ではクリミア戦争の古戦場を視察、そこからコーカサス、カスピ海を経て、テヘランからインドに入った。インドから彼はリヴィングストン搜索の第一歩である隊員、ポーターなどを調達する実質的な手配にむけて、モーリシャス経由でザンジバル島へと出発した。
- (2) たとえば、ヘロドトスの『歴史』や、紀元1～2世紀頃に書かれた『エリュトウラー海案内記』のなかに、現在のイエメンとザンジバルとの交易活動に関する記述がみられ、古くから人と文化の交流が行われていたことを窺わせる。
- (3) ザンジバルをはじめとして東アフリカ沿岸地域をめぐるアラブ、ポルトガル、インドの覇権争いの歴史と、その影響を色濃く受けて形成された固有の文化については、別稿で詳しく検証する予定である。
- (4) ヴァスコ・ダ・ガマがインドへの初航海の途次、モザンビークとマリンディに到達したのを嚆矢とすることは、周知のことであろう。
- (5) Gideon S. Were & Derek A. Wilson, *East Africa Through a Thousand Years: A History of the Years A.D. 1000 to the Present Day* (Nairobi: Evans Brothers Ltd., 1969) の年譜を参照。

- (6) 象牙は主としてインドに輸出されたが、ヨーロッパに輸出された場合には、象牙はピアノの鍵盤やビリヤードの球に使われた。Patric Manning, *Slavery and African Life: Occidental, Oriental, and African Slave Trades* (Cambridge: Cambridge UP, 1990), pp.138-9.
- (7) ザンジバルへの丁子の導入は、例えば、山川出版社の『世界現代史』第14巻『アフリカ現代史Ⅱ東アフリカ』(1978年刊)では、1818年にサイド(26頁)がなしたと、また、最新のアフリカ通史書である『新書アフリカ史』(宮本正興・松田素二編、講談社現代新書、1997年)では、1820年代である(232頁)と書かれている。しかし、実際は、そのどちらよりも早い1812年ごろであり、しかも、丁子の苗をもたらした人物とサイドとは関係がない。アブドゥル・シェリフの研究書の中には、1819年には丁子の木が15フィートにまで育っていたという記述がある (Abdul Sheriff, *Slaves, Spices & Ivory in Zanzibar: Integration of an East African Commercial Empire into the World Economy, 1770-1873* . London: James Currey Ltd., 1987, p.49)。
- (8) Frank McLynn, *Stanley: The making of an African explorer* (London: Constable, 1989), p.101.
- (9) 引用は1866年3月2日付けのリヴィングストンの日記より。Horace Waller ed., *The Last Journals of David Livingstone, in Central Africa, from 1865 to his death, vol.1* (London:John Murray, 1874), p.7.
- (10) 参考までに、前出の Abdul Sheriff は、前掲書の中で1850年ごろのザンジバルのバニアン人口が、500人から700人であったという数字を挙げている (Sheriff, p.148)。
- (11) Ibid., p.70.
- (12) *The Last Journals*, vol.1, pp. 61-2.
- (13) Ibid., p.7.
- (14) ザンジバルで奴隷市場が廃止となったのは1871年、サイドから数えて3代目のバルガッシュ (Barghash b. Said Al Busaidi) がザンジバルの領主の時であった。したがって、1866年当時はバルガッシュの勢力範囲内での奴隷の輸送は合法的だったわけである。
- (15) 1845年のハマートン (The Hamerton Treaty) 条約は、奴隷を積載したダウ船がブラバ (Brava) 以北に航海することを禁止した。これは、すなわち、実質的に他のイスラム圏との取引を遮断することを意味した。1807年の奴隷貿易禁止以来、英国はザンジバルに対して奴隷貿易を廃止させるべく、1822年の奴隷貿易船の航行許容区域を制限したモレスビー協定 (the Moresby Treaty of 1822) に次いで、このハマートン条約をサイド・サイドと結んだが、これらの禁止令にもかかわらず、1840年から1860年まで、奴隷はインドに輸出されつづけた。
- (16) Reginald Coupland, *The Exploitation of East Africa, 1856-1890, The Slave Trade and the Scramble* (London: Faber and Faber Ltd., 1968 (1939)), p.144.
- (17) ジョーゼフ・コンラッド著・中野好夫訳『闇の奥』(岩波文庫、1988 (1958) 年)、14頁。
- (18) ヨーロッパ諸国のアフリカ探検熱は、古くは17世紀にまでさかのぼる。英国では1788年、アフリカ大陸探検の目的のためにロンドンで「アフリカ内陸発見促進協会」が、ジョゼフ・バンクス卿によって

設立された。この協会は1831年に『王立地理学会』に併合された。それより前の1770年から72年にかけて、スコットランドの貴族ジェームズ・ブルース (James Bruce, 1730-94) がエチオピア一帯を探検、青ナイル川に到達し、また、西アフリカではマンゴ・パーク (Mungo Park, 1771-1806) が1795年にガンビアからニジェール川に到達した。これらの例外的な内陸部探索はあったものの、大陸全体としてみれば、アフリカは依然として未知の大陸で、知識は無いに等しかった。

- (19) リヴィングストン著菅原清治訳『アフリカ探検記』(河出書房, 1955年), 366頁。
- (20) Oliver Ransford, *David Livingstone, The Dark Interior* (London: John Murry, 1978), p.101.
- (21) David Livingstone, *Missionary Travels and Researches in South Africa; including a sketch of sixteen years' residence in the interior of Africa* (New York: Happer & Brothers, 1858), p.303.
- (22) *The Life and Explorations of David Livingstone, LL.D* (London: Adam & Co.), p.341.
- (23) *The Last Journals*, vol.1, p. 62.
- (24) *Ibid.*, p.186, p.222, et al.
- (25) *Ibid.*, p.62.
- (26) *Ibid.*, vol.2, p.212. ちなみに、この文章はリヴィングストンがスタンリーと会った後の、1872年7月12日に書かれたものである。
- (27) 探検隊は総勢192名からなり、そのうち運搬人が157名を占めた。2年分の食糧と物資を用意し、財力に物を言わせた、実に大掛りな搜索隊であった。スタンリーに終生批判がつきまとったのは、コンゴをめぐる問題ばかりでなく、近代武器を携行した大規模なその探検の形態と手法にあった。
- (28) ニヤムウェジ地方とは、大雑把に言って、ヴィクトリア湖北部から北東部にかけての地域。
- (29) 何一つ良いことのなかったタボラでの滞在だったが、スタンリーはここでアラブ人から一人の黒人奴隷をもらいうける。ンズグ・ムハリと言う名の少年こそ、スタンリーのアフリカ探検の従者として後に名を馳せるカルル (Kalulu, スワヒリ語でレイヨウの仔の意) であった。McLynn, *op. cit.*, p.131.
- (30) スタンリーは実際のところ死を覚悟したようである。彼は、木の幹を削って、「餓死に瀕す。H. M. S.」と刻むことで、後世に自分の証を残そうとした。バイロン・ファーウエル著川口正吉訳『ブーラ・マタリ：探検家スタンリーの生涯』上 (刀江書院, 1959年), 127頁。
- (31) *The Last Journals*, Vol.2, p.182.
- (32) *Ibid.*, pp.177-8.
- (33) スタンリーを迎えたりヴィングストンの服装は、青っぽい布製の帽子に袖の赤い胸衣、灰色のツイード地のズボンというものであった。ちなみに、スタンリーの方は、白のヘルメット、真新しいフランネルの洋服にウェリントン長靴という、場違いなほどのいでたちだった。ファーウエル, 128, 130-131頁。
- (34) *The Last Journals*, Vol.2, pp.182-3.
- (35) リチャード・バートン (Richard Francis Burton, 1821-90), 19世紀イギリスのアフリカ探検家。『千夜一

夜物語』のアラビア語原典からの英訳者としても知られる。

- (36) ジョン・ハニング・スピーク (John Hanning Speke, 1827-64), ナイル川の水源をヨーロッパ人として最初に突き止めた。その前年である1857年にはやはりヨーロッパ人としてはじめてタンガニーカ湖に到達した。女王の名を冠してヴィクトリア湖と命名したのも彼である。
- (37) Sheriff, pp.185-6.
- (38) ティプー・ティップという愛称は、彼が撃つマスカット銃の独特の響きからつけられたと言われている。McLynn, p.289.
- (39) ティプー・ティップの経歴に関しては、主として Kenneth. Ingham, *A History of East Africa* (New York: Frederick A. Praeger, 1967), G.S.Were & D.A. Wilson, *East Africa Through A Thousand Years*, Frank McLynn の前掲書を参照した。
- (40) Sheriff, p.54, p.108.
- (41) *The Last Journals*, vol.1, pp. 222-3.
- (42) Arthur Montefiore, *Henry M. Stanley, The African Explorer* (London: S.W.Partridge, n.d.), p.89.
- (43) *Ibid.*, 90.

<付記> 本稿は、1998年度東北大学教育研究プロジェクト経費「現代イスラム世界の重層的な社会構造—アイデンティティの多様性をめぐって」による研究成果報告書「19世紀東アフリカにおけるアラブの進出—リビングストン、スタンレーの記録を中心に—」を補訂したものである。

【主要参考文献】

- バイロン・ファーウエル著、川口正吉訳『ブーラ・マタリ：探検家スタンレーの生涯』(上,下) 刀江書院,1959年。
- Bierman, John. *Dark Safari: The Life behind the Legend of Henry Morton Stanley*. Austin:U. of Texas P., 1993.
- Blaikie, William Garden. *The Life of David Livingstone*. London: John Murray, 1908.
- Coupland, Reginald. *The Exploitation of East Africa,1856-1890, The Slave Trade and the Scramble*. London: Faber and Faber Ltd. 1968 (1939).
- East Africa and Its Invaders, from the earliest times to the death of Seyyid Said in 1856*. London: Oxford UP, 1956 (1938).
- Freeman-Grenville, G.S.P. ed. *The East African Coast: Select Documents from the first to the earlier nineteenth century*. London: Oxford UP, 1962.
- Hugon, Anne. tr. Alexandra Cambell. *The Exploration of Africa From Cairo to the Cape*.New York: Harry N. Abrams, 1993.

- Ingham, Kenneth. *A History of East Africa*. Revised Edition. New York: Frederick A. Praeger, 1967 (1965).
- Life and Explorations of David Livingstone, LL.D., The*. London: Adam & Co. 著者名, 発行年の記載無し。
- Livingstone, David. *Missionary Travels and Researches in South Africa; including a sketch of sixteen years' residence in the interior of Africa*. New York: Happer & Brothers, 1858. 菅原清治訳『アフカ探検記』河出書房, 1955年。
- Explorations du Zambese et de ses Affluents*. Paris: Librairie de L.Hachette, 1866.
- Lofchie, Michael F. *Zanzibar: Background to Revolution*. New Jersey: Princeton UP, 1968.
- Manning, Patric. *Slavery and African Life: Occidental, Oriental, and African Slave Trades*. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- McLynn, Frank. Stanley: *The Making of an African Explorer*. London: Constable, 1989.
- Montefiore, Authur. *Henry M. Stanley, The African Explorer*. London: S.W.Partridge, n.d.
- Oliver, Roland. & Gervase Mathew ed. *History of East Africa: The Early Period*. Nairobi: Oxford UP, 1967.
- Ransford, Oliver. *David Livingstone, The Dark Interior*. London: John Murry, 1978.
- Sheriff, Abdul. *Slaves, Spices & Ivory in Zanzibar: Integration of an East African Commercial Empire into the World Economy, 1770-1873*. London: James Currey Ltd., 1987.
- & Ed Ferguson ed. *Zanzibar Under Colonial Rule*. London: James Currey Ltd., 1991.
- Stanley, Dorothy. Ed. *The Autobiography of Sir Henry Morton Stanley*. London: Sampson Low, 1909.
- Stanley, Henry Morton. *How I Found Livingstone in Central Africa*. New York: Sampson Low, 1872. 村上光彦・三輪秀彦訳『リビングストン発見記』, 『世界ノンフィクション全集』第6巻 筑摩書房, 1960年。
- In Darkest Africa, or the Quest, Rescue, and Retreat of Emin, Governor of Equatoria*. 2 vols. New York: Charles Scribner' s Sons, 1891.
- Through the Dark Continent*. 2vols. New York: Harper & Brothers, 1878.
- Waller, Horace. Ed. *The Last Journals of David Livingstone, in Central Africa, from 1865 to his death*, 2vols. London: John Murray, 1874..
- Were, Gideon S. & Derek A. Wilson. *East Africa Through a Thousand Years: A History of the Years A.D. 1000 to the Present Day*. Nairobi: Evans Brothers Ltd., 1969.